

## はじめに 儒者の随筆

富士川英郎に『儒者の随筆』なる著があり、林梅洞（一六四三〜六六年。林羅山の孫）の『史館茗話』から中根香亭（一八三九〜一九一三年）の『香亭雅談』まで、十四種の漢文随筆集が紹介されている。その「あとがき」に云うように、これらの作品は漢文というだけで殆ど読まれず、忘却されていることを惜しんだもので、今日その多くは『日本詩話叢書』や『日本儒林叢書』に含まれ、手軽に読めるのはありがたい。巻頭の『史館茗話』は夭折した長男の志を継ぎ、父の林鷺峯が完成させたものだが、跋文の最後に悲嘆を吐露しているのには思わず胸が痛む。かように儒者の随筆には随所に彼らの心情や信条、また真情まで垣間見られ、滋味掬すべき逸話が少なくないが、私などに興味深いのは時おり見出す朝鮮との繋がりである。例えば西山拙齋（一七三五〜九九年）の『間牕瑣言』がそうである。

—— 祇園南海（一六七六〜一七五一年）は詩才をもって知られ、常に新井白石などの諸賢と会しては詩作に励んでいた。正徳（一七一〜一六六年）のころ、命によって朝鮮通信使の迎接に赴いたところ、一行の中に李東郭なる学士がいて、自ら「日東騷人」（騷人とは詩人の意）

を名乗って才を誇り、我に若く者なしという。そこで南海が詩の応酬を挑むこと数日、筆が止まるどころか詩想益々新たなるを見て、ついに東郭は屈したのである。別れに際し、さらに南海が立ちどころに二十四章の賦を作って贈ったが、東郭は逡巡するばかりで何もできず、大いに慙じて去ったのだった。やがて、釜山に着いた東郭は血を吐いて猝死したという。

正徳元年に趙泰億を正使とする朝鮮通信使が訪れ、日本各地で文人らと交流して伊藤莘野の『正徳和韓唱酬録』が編まれたことはよく知られる。製述官の李東郭は詩文の応酬に活躍し、その相手方には祇園南海もいた。つまり、『間牒瑣言』の逸話は史実を踏まえたものには違いないものの、技量を恥じて東郭が憤死したというのは事実無根も甚だしい。そこには、通信使に対する優越の喧伝によって自己の声価を高めようとする、徳川儒者たちの願望が籠められていよう。また『間牒瑣言』には荻生徂徠が「韓人は固より学識なく、文辞も亦た観るに足らず……猫兎を弄して娯みとなすに若かず」と嘯いて通信使らと会おうともしなかつた同工異曲の話が見える。

このような現象が生じるのは、申維翰が『海游録』「日本聞見雜録」で、日本は「文を以て人を用いず、文を以て公事をなさず」と指摘したように、科擧のない徳川治世下では文の能力は出世功名に直結しにくいいため、儒者たちがその存在価値を主張できる場は教育と外交に限定されていたからに他ならない。であればこそ、朝鮮通信使との応酬は彼らにとって数少ない

「晴れ舞台」であり、断じて遅れをとるわけにはいかなかったわけである。

とはいえ、江戸の儒者たちが通信使の時には憧憬のまなざしを向け、また時には見下さんと自意識過剰に振る舞うさまを見る時、些<sup>ちか</sup>か滑稽を感じなくもない。なぜなら、日本に派遣される使者らは外交上の体面を保つために必要充分な素養の持ち主ではあるものの、本国では第一流の文人とは言いがたい者が多かったからである。それは恰<sup>あたか</sup>も、中国から朝鮮に遣わされた天使（皇帝の使者）とそれを迎える朝鮮文人の關係に似ていよう。朝鮮側は文才をもつて鳴る人材を取り揃<sup>そろ</sup>えたのに対し、中国側はそうでなかった。卑近なたとえでいえば、団体戦の先鋒だけを見て大将の力量を知らないままだったとでもいえようか。

ことはそれだけに止<sup>とど</sup>まらない。なぜなら日朝の儒者にとって「文」そのものも同じではなかったからである。「文を以て人を用いる」、つまり科擧の有無もさることながら、さらに大きな違いは「文を以て公事をなす」にある。日本の儒者にとって公事とは殆ど外交文書の作成に限られていたが、朝鮮はそうではなかった。

高橋亨（二八七八～一九六七年。一九二六年京城帝大教授に就任。思想・宗教・文学にわたる膨大な業績をあげた）は朝廷に仕える士大夫が作成すべき文書の種類として

- 一．玉冊文
- 二．頒教文
- 三．教命文
- 四．升冊文
- 五．祭文
- 六．楽章
- 七．哀冊文、上樑文、賜祭文、致祭文、賜額文
- 八．教書
- 九．批答

十・箋　十一・表　十二・奏文　十三・国書　十四・檄げき　十五・露布

などをあげ、さらに「此こゝニ謂い所う文学とトハ廣義ニテ言フ者ニシテ　文語ヲ以テ表セル一切ノ思想的生産物ヲ包含ス」(『朝鮮近代文学』ノート、講本第一冊。ここでいう近代とは朝鮮時代をさす)といったように、思想や学術的なもののみならず、漢詩は無論のこと、いわゆる公用文のような実用的な文章まで含む。言い換えれば、内容のいかんにかかわらず文章表現として優れたものはすべて文学と看做すということである。

漢学の書でもないのに馴染みの薄い漢文体スタイルをあげたのは、このことが日韓の社会文化、ひいては文学にまで及ぶ「似て非なる」様相を端的に表すからだが、それをもたらしただ最大の要因はおそらく元寇げんこうだろう。ともに十二世紀に武人政権の樹立を迎えた日韓だが、辛うじてモンゴルの侵攻を躲かわした日本では近代期に至るまで「軍事」政権が続いたのに対し、高麗では台頭して国権を握った武人勢力があえなく潰え、元の支配のもと、徹底した漢文化政策が採られた。それ以降、韓国では文人政権が基本となったのである(故に、一九六〇年代に出現した軍事政権は韓国史のうえでは例外的な現象であり、かたや戦後日本の平和主義は新憲法による一時的な「幻想」に過ぎないだろう)。

俗に宦官かんがん・科挙かきやう・纏足てんそくを中国文化の三大特質とし、このうち韓国では宦官と科挙制度が定着するも、日本では一つも残らなかったが、それも元寇シヨックの余波によるものといえよう。

ところで、中国では猛威をふるった宦官は韓国ではあくまで「日陰者」だったのに比べ、科挙はそうではなかった。周知のように、科挙とは試験による人材選抜制度であり、文科と武科があったが、韓国で圧倒的に重きをなしたのは前者で、儒学的教養を備えた膨大な行政官を輩出した。彼らのことを士大夫と呼ぶ。

武士といっても、いくさに勝つためには合従連衡、または背信や変心を日常としていた戦国時代と、『鸚鵡籠中記』に描かれたサラリーマン化して暇を持って余す元禄期とは異なるように（『葉隠』も戦わなくなった武士のための精神訓にすぎない）、朝鮮王朝五百年（これは世界最長である）でも時期によって士大夫のイメージは大きく変容する。朴趾源（一七三七～一八〇五年）が「両班伝」（両班とは本来、東班＝文官、西班＝武官の総称だが、次第に世襲化した文官を意味するようになった）で痛烈に風刺したように（東洋文庫『熱河日記』所収）、朝鮮後期では時代遅れの教養をひけらかし、権威主義で威張りくさるしか能のない嫌われ者に墮するが、初期では違う。朱子学を奉じて新たな国家建設に邁進せんと、森羅万象に通暁する「通儒」たるべく努力精進した新進気鋭のテクノクラートだったのである。

本書で紹介する成俔（一四三九～一五〇四）は朝鮮前期の代表的な通儒の一人であり、その著『慵斎叢話』は彼の随筆集だが、当時の世相を知るには最上の資料として知られる。そこには朝鮮文学独特の事情があるので、ここで少しばかり触れておきたい。

日本では詩歌や小説、それに戯曲が早くから活発に創作されてきたが、朝鮮では漢詩以外の詩歌や小説は朝鮮時代後期になってようやく盛況を見せるものの、戯曲に至っては二十世紀初頭までソウルには劇場すらなかった。これは何を意味するかといえば、当代の社会や風俗を知るのに詩歌や小説はあまり役に立たないということである。とはいえ「生きとし生けるもの、いずれか歌を詠まざりける」、この世に生きる喜怒哀楽を書かずにおれないのはいずこの国でも同じこと。ただ、その表現手段が異なるだけなのだ。朝鮮時代前期の場合、その役割を担ったのが『慵斎叢話』のような士大夫の随筆であり、また本書で数多く引用した『朝鮮王朝実録』のような史書だったのである。

二〇〇二年のワールドカップ共催を契機に俄かに「韓流ブーム」なるものが沸き起こり、『大長今』や『許浚』をはじめとする歴史ドラマが数多く紹介され、好評を博したことは周知のとおり。それらの多くは秀作・力作ぞろいで見ごたえはあったものの、いざ作品を通じてどれほど朝鮮時代を正確に理解できるかと問えば、憎まれ口を承知でいうなら「水戸黄門を見て江戸時代を知ろうとする」と本質的には変わらない。無論、それ以前の韓国・朝鮮など眼中にあつて無きが如き扱いを思えば、韓流ファンの熱狂と持続ぶりはご同慶の至りではある。さりながら昨今の嫌韓・反韓の蔓延を見るにつけ、その底の浅さとひ弱さを今さらながら痛感せざるを得ない。蓋し、反韓憎悪の拡散はインターネットの風に煽られて燎原の火よりも捷い

のに比し、個々人の理解は遅々として深まらないからだろう。

とはいえ、束手無策ではあまりに芸がないというもの。「往事を述べて、来者を思う」と司馬遷も述べた（『任少卿に報ずる書』『文選』巻四十一）。このあたりで一度頭を冷やして古典世界に逍遙するのにも、迂遠なようではかえって有効かもしれない。手前味噌ながら、それにはこの『慵斎叢話』が格好の先導役となりえよう。なぜなら、現代日本の基礎に江戸時代があるように、現代韓国の基底には朝鮮時代があり、それを形作ったのが士大夫たちで、その士大夫の世界を何より雄弁に語るのがこの書だからである。しかも、一読すればすぐに気づかれようが、およそ私たちの儒教社会に対する先入観を打ち破る奇異譚に満ち満ちており、「事実は小説よりも奇なり」はここでも紛れも無く真実であることが再確認できよう。

ただ、『慵斎叢話』（全十巻）にはおよそ三百二十もの長短さまざまの文章が収められており、その話題は士大夫間の交遊から宮中世界のトピック、また歴史・文学論や自然現象、あるいは巷の奇譚・笑話に至るまで実に多様であって、そのすべてを小著で尽くすことは困難である。そこで、本書では「人間的な、あまりに人間的な」ともいうべき、極めて人間臭い話題を中心に紹介することにした。馴染みのない朝鮮時代へのアプローチのしやすさを優先したためだが、著者の成俔や『慵斎叢話』の概要を先に把握しておきたいという方には第六章から読み始めることをお勧めする。